

第600号



喬木村公民館：長野県下伊那郡喬木村6664



発行日 2019年3月18日
 発行責任者 喬木村公民館 長 徹
 市 瀬
 編集責任者 公民館 編集部 長 志
 仲 田 久
 印刷 龍共印刷株式会社

公民館平和学習会

「戦時下の飯田・下伊那のすがた」 〜銃後としての飯田・下伊那地域〜

戦争は戦地だけで行われていたわけではない。この私たちの住んでいる地元でも「銃後」としての戦争が行われていた。今年度第四回の平和学習会「戦時下の飯田・下伊那のすがた〜銃後としての飯田・下伊那地域〜」と題して伊久間在任の原英章先生の講演会が去る二月二十二日に行われました。

日本は満州事変から太平洋戦争へ、中国との戦争から世界大戦へと広い地域での戦争を行いました。上海事変の時に自爆した兵士の「爆弾三勇士」の像が猿倉の泉の片隅にあるそうです。それは三勇士が犠牲になったことを慰霊するものではなく、自爆を讃えるもの（軍

国主義）であると聞き大変驚きました。戦争が激しくなる中で戦争に必要な兵士・軍事工場への徴用・軍馬・食料・物資を「銃後」として送り出したのです。また、飯田風越高校では水素を入れた「風船爆弾」を作って一万个放球し、その内三百個ばかりが気流に乗ってアメリカまで到達したものの、海へ落ちたりして被害はほとんど無かったそうです。一万個も作って…と思ってしまう

ましたが、前線で戦えない思いだったのかな〜と思ひ、これが本当の銃後としての戦いだったのかと思ひました。当時の学生たちはほとん

ど授業も受けられず、このような風船爆弾作り・勤勞奉仕・軍事工場などへの勤勞動員などで働かされていたそうです。さらに徴兵により地元の勞働力が不足となり、地元の水力発電ダム建設のために朝鮮人・連合国捕虜・中国人が強制労働をさせられました。平岡ダムでは三千人以上の人が、飯島発電所では九百三十八人が強制労働をさせられ連合国・中国人は百十九人が犠牲になって

います。朝鮮人は何人が犠牲になったか不明だそうですが、犠牲者は火葬にされ、遺骨も遺族に送られることはありませんでした。日本は敗戦で三百十万人の犠牲者、多くの被害を受けました。しかし、その反面で日本人が加害者でもあったのです。家族が出征したまま帰らず、死亡した証がなければ信じられない悲しい思いは日本人も朝鮮人も中国人も同じです。そして今でもその悲しみと怒りで憎しみ合う「終わらない戦争」が続いているのだと思ひました。

敗戦後七十四年。今でも私たちの気付かないところに戦争の爪痕が残っていることを改めて知りました。そのような調査研究を地道に続けておられる原先生に改めて敬意を表したいと思ひます。同時に当時のことを語られる方が高齢になられる中で、一人でも多くの方から体験談をお聞きして、歴史として残すこと、過去の歴史から学び再び戦争が起きないように今に活かすことが大切と締められました。

戦争のなかった平成の時代が終わろうとしています。次の時代も戦争のない、そして差別・圧迫・強制などの人権侵害のない「平和な時代」であることを願ひ、これからも地道に平和学習を続けて行きたいと思ひています。

戦争は戦地だけで行われていたわけではない。この私たちの住んでいる地元でも「銃後」としての戦争が行われていた。今年度第四回の平和学習会「戦時下の飯田・下伊那のすがた〜銃後としての飯田・下伊那地域〜」と題して伊久間在任の原英章先生の講演会が去る二月二十二日に行われました。



飯田歴史研究所 調査研究員 原 英章さんの講演

日本は敗戦で三百十万人の犠牲者、多くの被害を受けました。しかし、その反面で日本人が加害者でもあったのです。家族が出征したまま帰らず、死亡した証がなければ信じられない悲しい思いは日本人も朝鮮人も中国人も同じです。そして今でもその悲しみと怒りで憎しみ合う「終わらない戦争」が続いているのだと思ひました。

敗戦後七十四年。今でも私たちの気付かないところに戦争の爪痕が残っていることを改めて知りました。そのような調査研究を地道に続けておられる原先生に改めて敬意を表したいと思ひます。同時に当時のことを語られる方が高齢になられる中で、一人でも多くの方から体験談をお聞きして、歴史として残すこと、過去の歴史から学び再び戦争が起きないように今に活かすことが大切と締められました。

戦争のなかった平成の時代が終わろうとしています。次の時代も戦争のない、そして差別・圧迫・強制などの人権侵害のない「平和な時代」であることを願ひ、これからも地道に平和学習を続けて行きたいと思ひています。

水泳女子のエース池江璃花子選手が「白血病」の診断が出たことが公表された。「エッ！」と思わず絶句してしまいました。来年に迫った東京オリンピックで、活躍してくれるだろうと誰もが期待していただけに、多くの日本人が信じられないという思いになったろう。この報道を受け、インタビュに心えたS五輪担当大臣の「がっかりした」発言。突然病に見舞われた池江選手への配慮のなさに驚かされたのは私だけではないだろう。

あの時

白血病といえは以前は不治の病とされていたが、今は医学が進歩し、決して不治の病ではなくなりました。俳優の渡辺謙さんをはじめ、スポーツ界ではアルビレックス新潟の早川選手やプロ野球オリックスに所属していた岩下投手など、病を克服して復帰した人もいます。絶望でふさぎ込んでしまってもおかしくない状況なのに、なぜ池江選手は前向きでいられるのだろうか。「今は治療に専念し、一日でも早く、また、さらに強くなった池江璃花子の姿を見せられるように頑張っていきたい」と前向きである。その姿に触発され、今、骨髄バンク登録者が劇的に増えているという。

自分を襲った信じがたい病を公表することで、病と闘う多くの方に勇気を与えただけでなく、社会現象まで巻き起こしてしまう池江選手。アスリートとしてもだけでなく人間としても超一流であった。まずは病を克服することに専念してほしい。そして、必ず戻ってきてくれると信じて応援し続けたい。

阿島祭りの竜頭

文化財保護委員 大原 成章

阿島祭りは、古くから毘沙門様のお祭りとして、また、明治以降は神武天皇祭とも呼ばれ長い間の伝統を今に伝える古式豊かな珍しいお宮とお寺の習合したいわゆる神仏混淆の祭りでもあります。春の阿島祭りは例年四月の第一日曜とされ、村内最初に行われる春祭りです。祭り当日正午、阿島里原の八幡神社で五十余名からなる御渡御行列は、神体を神輿に御遷の式を終

えて御出立となります。行列の先駆（神主、氏子一人）に次いで先頭に立つ竜頭は青竹の先に飾られます。この竜頭の作者は立川四郎富昌という諏訪高島藩御目見内巧として召し抱えられていた人物です。富昌は宮大工として重要文化財の諏訪大社拝幣殿、豊川稲荷社拝殿等を建立しております。しかし、本人の最も得意としたものは彫刻であるといひ、京都御所の安政御造営にお

ける彫刻等が伝えられております。この名工の手による竜頭の由来は天保八年（一八三七）蚕糸業界の大先覚者長谷川範七の義父長谷川半七と庄屋、福沢太郎左衛門が、痛みの激しい竜頭に代えて富昌に依頼し、阿島村へ寄付されたものです。

竜頭は今でも八メートルの青竹に飾られます。風が吹くときは大変苦勞するようです。里原の神輿蔵前の広場で御行列を出迎えた各耕地からの旗幟、囃子屋台、阿島獅子が順次練りながら毘沙門天の鎮座する安養寺に向



立川四郎富昌作と伝えられる竜頭

おしらせ

運動公園グランド照明LED化改修工事完了のお知らせ

運動公園グランド照明が新しく生まれ変わりました。現在グランド整備工事を行っているため利用開始は4月からになりますが、大勢の皆さんのご利用をお待ちしています。



運動公園グランド照明LED化改修工事はtotoの助成を受けて実施しました。



自分を襲った信じがたい病を公表することで、病と闘う多くの方に勇気を与えただけでなく、社会現象まで巻き起こしてしまう池江選手。アスリートとしてもだけでなく人間としても超一流であった。まずは病を克服することに専念してほしい。そして、必ず戻ってきてくれると信じて応援し続けたい。

(館長)

第36回 ふるさとづくりフォーラム

テーマ 来たぞ災害！あなたの地域・家族は大丈夫？

二月十七日(日)福祉センターを会場に「第三十六回ふるさとづくりフォーラム」が開催されました。今年度は大きな災害が立て続けに起こったため、「災害を題材にしました。テーマを「来たぞ災害！あなたの地域・家族は大丈夫？」として、講演を、飯田市危機管理室の後藤武志さんにお話し、「ホンネで語る！災害の実態」命を守り、絆を築くために」と題して熊本地震の時に派遣された益城町の経験などを話していただきました。分科会は「第一分科会」あなたとあなたの地域を守る分科会、「第二分科会」地域の人の地域を守る分科会としました。実行委員の皆さんのご協力のもと、今回フォーラムを無事終えることができました。

あいさつ
実行委員長
知久隆文



今年で三十六回目を迎える、ふるさとづくりフォーラムが、去る二月十七日に約八十名の参加のもと無事

行つことができました。例年、各分館の方や団体の代表者の皆様に実行委員を組織して頂き、その実行委員でフォーラムを運営して頂く手法でやってきましたが、昨今は話題を見つけない状況や、今までのように運営するのは難しいとの意見もありましたので、今回は話題提供と裏方として活動していた本館社会部が主体となつて運営していく新しいスタイルでのフォーラムになりました。このスタイルについては、今後のフォーラムのあり方として改めて検証していきたいと思っております。

さて、今回のフォーラムは「来たぞ！災害」というテーマが示すように、実際に災害が起きてしまった時の防災のあり方から震災後に対処していかなくてはならない事などを、講師として飯田

講演会

ホンネで語る！災害の実態

命を守り、絆を築くために

講師 飯田市危機管理室 次長補佐 後藤武志さん



この町民から、損害の調査と、罹災証明書の発行が遅いとクレームの電話が庁舎にかかってきていた。〇益城町は大阪よりプロック塀の倒壊の被害が酷かった。このときに危険視していれば、その後の大阪の事故は防げたかもしれない。〇ごみについて、初期に仮置き場をつくり、ある程度分別しておいた方がその後効率的に動ける。

〇熊本地震において 熊本兼益城町の職員は、担当職員以外は全員避難所に配置されたため、他の処理に手が回らず、復旧が遅れた。

〇避難所に指定されていた体育館は屋根が落ちかかっていた。益城町は危険と判断して避難所として使用しなかった。その後の地震で天井が落下。町の判断は正しかった。

〇発災から十日目以後藤さんが応援に駆けつけた。その情報が出すこと 応援を

〇情報を出すこと 応援を

〇地震の発生率はどんどん

〇地震の発生率はどんどん

〇地震の発生率はどんどん

〇地震の発生率はどんどん

〇最後に、本日は村の人口の1%が集まった凄いいこと。地区に帰って誰か一人に伝えれば1%となる。自分が主人公となって、誰かがやってくれることではないというところにフォーラムの話し合いの中で気付いてくれたのではないのでしょうか。ぜひ帰ってから今日何をするかを考えて欲しい。

〇最後に、本日は村の人口の1%が集まった凄いいこと。地区に帰って誰か一人に伝えれば1%となる。自分が主人公となって、誰かがやってくれることではないというところにフォーラムの話し合いの中で気付いてくれたのではないのでしょうか。ぜひ帰ってから今日何をするかを考えて欲しい。

〇最後に、本日は村の人口の1%が集まった凄いいこと。地区に帰って誰か一人に伝えれば1%となる。自分が主人公となって、誰かがやってくれることではないというところにフォーラムの話し合いの中で気付いてくれたのではないのでしょうか。ぜひ帰ってから今日何をするかを考えて欲しい。

〇最後に、本日は村の人口の1%が集まった凄いいこと。地区に帰って誰か一人に伝えれば1%となる。自分が主人公となって、誰かがやってくれることではないというところにフォーラムの話し合いの中で気付いてくれたのではないのでしょうか。ぜひ帰ってから今日何をするかを考えて欲しい。

〇最後に、本日は村の人口の1%が集まった凄いいこと。地区に帰って誰か一人に伝えれば1%となる。自分が主人公となって、誰かがやってくれることではないというところにフォーラムの話し合いの中で気付いてくれたのではないのでしょうか。ぜひ帰ってから今日何をするかを考えて欲しい。

〇自分の命、自分で守れるか考える。自分が怪我をする、動けない、働けなくなってしまうことを想像したことがありますか。家具の固定は万全か。

〇この地域は公民館活動が盛んで自治がしっかりしている。

〇安全な場所に避難して、安否を確認(要救助者がいるか)必要な救助を要請する。在宅避難でも支援はあるので、必ず登録を。

〇安全な場所に避難して、安否を確認(要救助者がいるか)必要な救助を要請する。在宅避難でも支援はあるので、必ず登録を。

〇安全な場所に避難して、安否を確認(要救助者がいるか)必要な救助を要請する。在宅避難でも支援はあるので、必ず登録を。

市危機管理室次長補佐の後藤武志さんをお迎えし、基調講演と分科会を行いました。今回は一般住民の他、各地域の役員の方や関係者の方々にも参加して頂き、震災後の不安や困りごと等を出し、解決策や今後の防災について事前にできる事などを話し合い、ルールの範囲内で臨機応変な対応をしないといけないという

上がっている。今までに無い動きをしている。

この分科会では、将来予想される災害に備えて、日頃家庭で話し合っていることや、心がけていることを出し合つて、より減災できる方法を、二つのグループに分かれて話し合いました。

初めに質問として、震度6強の地震が起きて家で被災した場合に、どんな行動をとるか出し合いました。まずは、家族の安否を確認して、「安全な場所へ避難する」「子供の必要なものを持ち出したい」「近所の人の安否を確認して協力し合う」といった答えが多く出ました。他に、「高齢の家族が心配だ」「地震が夜だったら一層不安だ」「ペットも助けたらどう対処したら良いか」など、それぞれの家族で困るだろうと思われることも出され

ことを学びました。いままでのフォーラムでは、防災については特に災害が起きる前に危険箇所の把握や備えに力点を置くことが多かったと思いますが、今回は震災直後の問題点も探ること、新たな取り組みが始まっている年一回の村全体の防災訓練も活かして内容になったのではないかと思います。

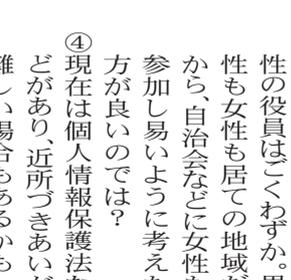
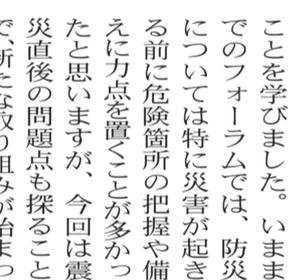
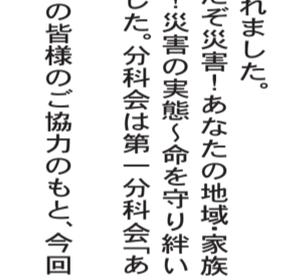
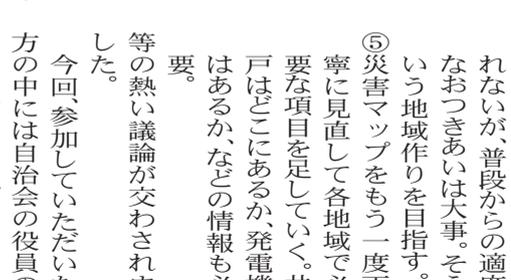
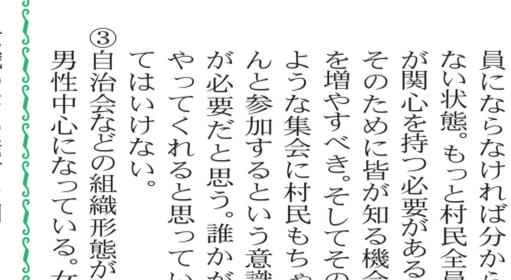
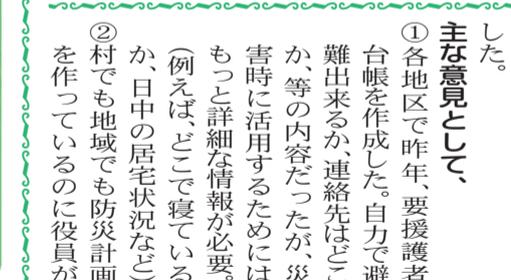
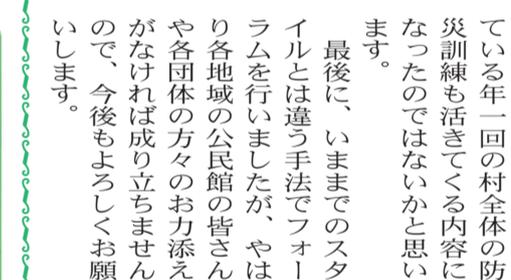
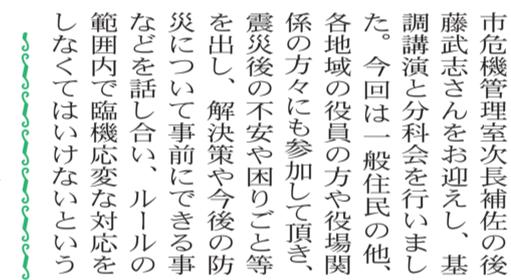
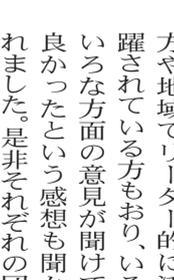
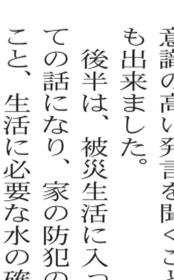
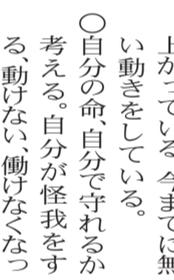
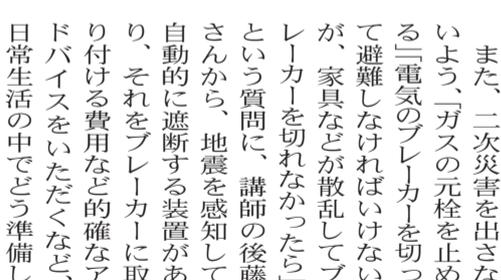
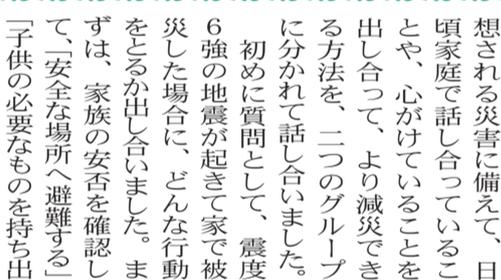
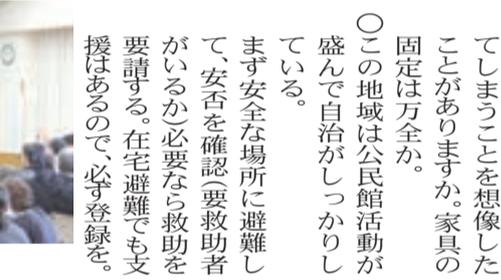
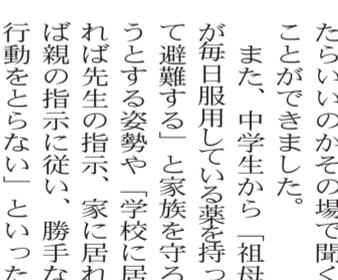
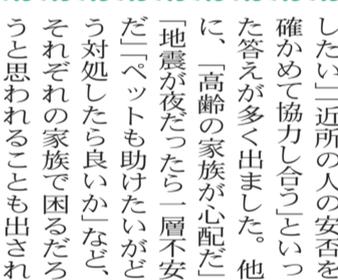
最後に、いままでのスタイルとは違う手法でフォーラムを行いました。やはり各地域の公民館の皆さんや各団体の方々のお力添えがなければ成り立ちませんので、今後もよろしくお願ひします。

この分科会では、総勢五十数名を三グループに分けて、地域のおかれている現状や問題点について話し合いました。

この分科会では、総勢五十数名を三グループに分けて、地域のおかれている現状や問題点について話し合いました。



講演会の様子



各分科会を巡る講師の後藤さん

各分科会を巡る講師の後藤さん

各分科会を巡る講師の後藤さん

各分科会を巡る講師の後藤さん

各分科会を巡る講師の後藤さん

参加者アンケートより

- 中学生も一緒にあって災害について学ぶことができ、とても良い機会であったと思う。先生の話をもう少し聴きたかった。
- 婦人の協力の大切さを感じた。日赤奉仕団活動の活発化が必要。
- 災害にあったときの対応や普段からの備えが大切だと改めて知れました。
- 災害にあった時、情報の共有が大事だと感じました。中学生にしかできないこと(助け合い)などを積極的に行えたらと思います。
- 防災について、学びを深められた。
- 始めて知ることがたくさんあり、とても勉強になった。
- 「防災」という大切なテーマに取り組んでいただけで良かった。時間が足りないのでは。講演は十分必要だと思います。
- 災害のことなどためになった。
- 家族と災害にあったとき、どのようにするのか話し合いたいと思った。
- 災害になった時の自分の安否のためにいろいろしてよかったです。自分は大丈夫という気持ちです。各地区自治体の
- 状況などがわかった。
- よく考える。
- グループ内で地域のための良い話、意見が出ています。今後地区に呼びかけをしていただきたいです。
- 地域、行政、社協 etc: それぞれに今後防災について、さらに取り組んでいくと思うので、来年度も第二段としてやって頂きたい。その際は村内の具体的な実践を共有できると良いと思います。
- フォーラムなのかシンポジウムなのかよく分からない。皆さんの関心の高いテーマだけに残念です。
- せっかくの分科会、声が聞こえないため会場をわけるとよいのでは。
- 次回個別の案件、テーマを具体的に集約して、検討してもらいたい。
- グループの人数を半分くらいにしていたと更に色々な意見を聞くことができるので、より良い内容になると思います。参考とさせていただきます。ありがとうございます。

ふるさとづくりフォーラムを終えて

公民館長 市瀬 徹

今年のふるさとづくりフォーラムは、テーマを「来たぞー災害 あなたの地域は家族は大丈夫？」とし、災害時の対応についてみなさんと学び合う場となりました。平成最後のフォーラムでしたが、平成の時代は災害、特に大きな地震に見舞われた時代でした。平成七年に起こった阪神淡路大震災、二十三年の東日本大震災、二十八年の熊本地震、昨年六月には大阪北部地震、九月には北海道胆振東部地震と大きな地震が続きました。また、最近地球温暖化の影響からか、大型の台風、集中豪雨による洪水や土砂災害も増えているように思います。このような状況から考えると、私たちの住む下伊那も心配されている南海トラフ大地震などの災害にいつ見舞われてもおかしくないと思いま

す。しかし、長い間大きな災害に遭っていない私たちは、災害に対する危機感が薄く、「自分は大丈夫」と根拠のない自信をもっているのではないかと思っています。

講師の後藤さんは、「災害が起こった時、自分が怪我をしたり亡くなってしまったら、誰かを守ってほしい」と言われ、災害時にまずやらなければならないことは、自分を自分で守ることだと話されました。地域住民の命を守るために、村当局はもちろん自治会や区でも様々な想定をもとに災害が起こった場合の対応を考えていると思います。しかし、命を守る責任は自分自身にあることを自覚し、事前の対策をしたり、万に備えて様々な準備をしたりしておく必要があると思えました。また、何が起こるか分

からないのが災害。だから「マニュアルが整備されているから大丈夫」と過信していると、思わぬ落とし穴にハマってしまうこともあると思います。

だとすれば、いつ起こるか分からない災害に対し、私たちはどのような備えをしておけばいいのでしょうか。みなさんは今年のフォーラムを通してどんなことに気づかれたのでしょうか。個人では、避難用品を準備して避難行動のシミュレーションをしておくことや、災害時の行動について家族と話し合っておくこと、自治会では、災害時の対応マニュアルを整備し、役員はもちろん、住民にその周知徹底を図っておくこと、マニュアルに沿って行動できるように、適切な訓練を平時にきちんとしておくことな

どが大事だということが改めてはつきりました。しかし、「それだけでは十分ではない」ということを私は強く感じました。災害が起こった時、適切な対応ができるか、災害後の住民の生活を守ることができるとい「力ギ」は、地域コミュニティの力が如何に育っているかだということに改めて感じました。つまり、最も大事な備えは、まさに公民館活動のめざす、地域の人達のつながりと人をいわたる思いやりの心を高め、おくことなのではないかと思えます。

また、今回のフォーラムには中学生が十人も参加してくれ、分科会では積極的に発言してくれました。災害時には中学生も地域の一人となることができることを担い、地域を支えていくという意識をもってくれているのだと感じました。発生から八年になりますが、東日本大震災の時も高校生や中学生が様々な役割を負っ

て活動したことが、長い避難生活を余儀なくされた地域の大きな力となったことは知られています。単に守られ助けられる存在ではなく、中学生も地域の大事な戦力として考えて行ってよいのだと強く思いました。

最後になりますが、お忙しい中ふるさとづくりフォーラムに来てくださり、ご講演をはじめ分科会、全体会で適切なご指導をいただいた後藤さんにお礼を申し上げます。また、ふるさとづくりフォーラムに参加してくださったみなさん、企画運営にかかわっていただいた実行委員のみなさん、関係していただいたすべての皆さんに感謝したいと思います。

そして、ご参加いただいたみなさん一人一人が、ふるさとづくりフォーラムを通して気づいたことを周りの方に伝え、災害に強い地域づくりが進んでいくことを強く願い、まとめたいと思えます。

学遊館広場 ~冬の星空観察会~

喬木村内の小学生と保護者を対象とした学遊館広場で、二月二十三日(土)に「冬の星空観察会」が開催されました。会場はこども学遊館、講師に喬木村在住の村澤明彦さんと豊丘村在住の稲垣尚文さんをお迎えしました。参加者は子ども三十七名、保護者十一名、合計四十八名と大変賑やかな会となりました。

夕方六時にこども学遊館へ集合し、ちょうど話題となっていた小惑星探査機「はやぶさ2」がリュウグウへの着陸に成功したお話を聞くことができました。また、今後注目の天文現象についても教えていただきました。

お話のあとは、参加者でテーブルを囲み、すいとん汁と持参したおにぎりを食べました。野菜がたっぷり入ったすいとん汁は好評で、たくさんの方がおいしく食べていました。

外が暗くなった夜七時すぎから外の芝グラウンドに出



望遠鏡をのぞきこむ参加者



第1分科会の様子



第2分科会の様子

て、オリオン座、カシオペア座、北斗七星など特徴的な形の星座を教えていただきました。また、講師のお二人にお持ちいただいた望遠鏡で火星やおうし座の散開星団「すばる」、オリオン大星雲を見せていただきました。オリオン大星雲は、星が生まれる場所です。冬の夜空を見上げて広い宇宙に思いを馳せ、良い時間を過ごすことができました。

学遊館広場は、年間六回程度、土日にこども学遊館を拠点に活動しています。ぜひご参加ください。

公民館報 600号を迎えて!

仲田久志

公民館報が六百号を迎えた。第一号は昭和二十八年八月一日発行だった。そこには村の財政から始まり、農業の問題、戦後の農村での人口増の問題、夏の伝染病についての予防の方法など、生活全般にわたった内容が掲載されている。今の時代の様に広報が多岐にわたっていったので、公民館報が村民の生活の多くの部分をカバーしていた。

創刊百五十号記念の縮刷版のあとがきの中に「村民の生活の必要にこたえ、教育、学術、文化の普及と向上につとめて、地域民主化の推進に役立てるべき使命にたつ公民館の主要な部門としての」とある。戦後のことで、民主化という方向に多くが向いていた時代を思わせる、今は多様化の時代で、みんな同じという時代ではなく、違いを認め合う時代なのかもしれない。それにより地域が強く発展して行くのかもしれないと思う。何を目指して行けばいいのかはつきりしないかもしれない。縦社会に浸かってばかりだと息づきにくくなるが、そんなもんだというあきらめもあるかもしれない。横のつながり、地域のつながり、新しい発見があるかもしれない。村民が生き生きと生活出来る様、館報が役に立てばと思う。

たかぎ短歌会

如月歌会詠草

誕生日祝いくれたる子や孫は亡夫居ることくケーキ供える
小 椋りよ

詠題の「光」と言ふ語に込められた一人ひとりの思ひ伝はる
内山和子

ほんやりに亥年の男女が点火して炎高々歓声上がる
多田 昭

からからの柿の落ち葉の布団着て土手の落の臺雨を待ちあゝる
木林睦枝

新年会話し上手な人の居て和やかなひと時昼神の宿
木下寿子

ひと日ごと椿の蕾ふくらみて窓辺に春を招くがごとし
関島春子



年始より不安の多き養豚業へこたれるなど我を励ます
知久美子

平成の最後の年も奈良井川北の海へと一途に流る
桐原邦夫

皇后の御歌のごとくささやかな癒し探してわれも生きなむ
市瀬准子

初雀障子の影に踊り見ゆ吾の心もキラキラ光る
大村初見

新年に喜寿の祝いと長男は夫と我連れカラオケに行く
田中妙子

滝を背に写真に在りし若き日の父思ひつつ那智に詣でぬ
元島康子

群青のフィヨルドと赤き雲を背にムンクの叫び声聞こえ来る
福澤亀人

編集後記

三月、春は出会いと別れの時で、新しく入る人と、そこを去る人がいる。そして新しい発見をして行く。そんな時だ。「人生とは」と大きな事を言う様だが、出会いと別れのくりかえしだと思ふ。歌にもあるが、そこで色々な事を思い、又発見して行く事で人は成長していくんだなと思う。この世は知らない事だらけ、毎日わくわくすれば楽しいものだ。年をとると、何事にも発見が少なくなる。子供の頃の事は、毎日の朝から夜までのすべての事に感動しておぼえているが、年をかさねると感動が少なくなると、チコちゃんと言っていた。

